

記念講演

演題「上川アイヌとサケ」

講師：瀬川拓郎 氏（札幌大学教授・前旭川市博物館館長）

1 なぜサケなのか？

考古学者瀬川先生が初めて訪旭したのは 20 代の事だったと言う。上川盆地にある遺跡は二百数十箇所ある。その中で錦町 5 遺跡（10 世紀の察文時代上川アイヌ集落跡）では、大正時代まで河川が集落跡を貫いていた。その竈の灰からは大量のサケの骨が出土している。調べて見ると川の跡に部分的に杭の痕跡があった。遡上するサケを止めて採取していた跡かと思われる。また同遺跡の堅穴住居跡には、白い砂の重層構造が認められた。つまり本遺跡は再三河川氾濫に晒されて来た土地であり、通常このような場所に集落が形成される事は無い。

上川アイヌはサケと関係が深かった。旭川には 1884 年（明治 17 年）の屯田兵入植以前、300 人くらいのアイヌがいた。緑町付近の例を見ると、そこには 10 数箇所の集落があった。1~10 軒の集落でありクマの檻・サケの乾し場・住居が、低位段丘面に形成されていた。幕末の探検家松浦武四郎は、旭川を 2 回訪れている。その残した絵図によると、上川アイヌはアイヌ犬を訓練してサケ漁を手伝わせていた。犬によるサケ採取は登別にもあるが、非常に珍しい。またもう 1 枚の絵（チンクシベツ）によると、アイヌが本流ではなく枝流に杭を置いてサケ追い込み漁を行っていた事が分かる。

2 サケ漁

1872 年（明治 5 年）の調査によると上川アイヌは、春にはまずヤツメウナギ、ついでサクラマスを採取。8 月からシロザケ（保存食）を取り、また夏にはオオウバユリ、ついでシカ、冬にはクマ漁で生活していた。この年、68 戸で 90,000 尾を採取した記録がある。その 20 年前（松浦武四郎の時代）、1 人暮らしの老婆でも 800 尾、1 軒の飼う犬が 2,000 尾獲っていたとの記録があり、如何に莫大なサケの資源量だったかが分かる。サケ漁の時期、アイヌの成人男性は石狩川河口の採捕場に動員されてサケ漁をするため、このような留守宅の「内職」のような形でサケ漁が行われていた。和人によって塩サケが大量生産される近世後期以前には、上川アイヌは干鮭を 1 戸あたり 3~5,000 尾も獲っていた。ところが、
＝サケの交換レート＝

17 世紀：コメ 10kg＝干鮭 100 本

19 世紀：鉄鍋 1 個＝干鮭 880 本／漆塗りの行器 1 個＝4,800 本

このように和人が相当交易品の値段を釣り上げたため、サケの数が足りずに、やがて鮭の価値が更に下がると、無人の地であるニセコ辺りまでサケ漁をするために上川のアイヌは出向いていたらしい。

この点について質問があった：斃死個体（ホッチャレ？）の利用は？～多分無かっただろうとの事

3 干鮭（からさけ）とは？

アイヌは丸のままのサケを素干しにし、その後囲炉裏で燻製にして煤で真っ黒になった無塩製品として出荷していた。一方でアイヌは製塩をしていなかった。和人はそれで、干鮭を戻して煤を取って食べた。和人は炭水化物を食べるため、食事に塩が必要である。一方で北海道のアイヌは肉食中心のため、製塩をする必要が無かったのである。またサケは油分が少ないため、保存上優れている。とは言え塩があると旨いので、8~10世紀にはアイヌが塩を輸入するようになったと思われる。他方、上記のような干鮭を出荷したのは、沿岸部ではなく内陸のアイヌであった。沿岸でサケを獲った和人は、それを塩蔵して出荷した。比べて内陸では漁の技術が発達した和人がいないし、また遡上したサケは油が抜けて保存しやすい。このためアイヌが出荷した干鮭は、内陸産が多かったのである。干鮭＝干した鮭。アタツ：「とば」・サッチャップ：「開き」とは違う。ただし「干鮭」は沿岸部で塩蔵された和人漁獲の鮭、北海道内陸アイヌの素干しの鮭、両方を言うらしい。（用語の混乱）

4 上川盆地のサケの歴史的生態を考える

上川アイヌはどこでサケを獲ったか。石狩川・忠別川・江丹別川程度。

5 上川アイヌのサケをめぐる1万年

上川盆地の平坦面は石狩川及び忠別川の扇状地である。

山：高位段丘面

丘：中位段丘面

川：低位段丘面

和人はこの内、中位段丘面に住居を形成した。1891年（明治24年）永山兵村・1892年（明治25年）旭川兵村を開村。一方、江戸時代のアイヌは低位段丘面（扇端の湧水帯）に集落を建てた。サケは、忠別川では旭川医大前、石狩川では比布の手前まで上っており、集落もサケ遡上限界点までしかない。アイヌは春先、湧水源（泉）から発する川幅が狭く水深が浅い枝流でサケ漁をしていた。この源泉をアイヌ語で「メム」と呼んだ。明治時代にあった鮭の孵化場は、神楽町や春光町の現第2師団敷地内のメムを利用して作られていた。

上川アイヌは、石狩川上流グループ、下流グループ、忠別川グループの3つに分かれていた。これは各河川の湧水源を中心とする3つの産卵場があったためであった。ただ、上流突嶺山付近の産卵場には枝流がないため、その更に下流の部分が石狩川下流グループを形成した。各グループは通婚が無く、それぞれ上川盆地以外の特定の場所のアイヌと通婚し、たった300人しかいない上川アイヌの3つのグループは、それぞれ漁法・言語・料理法・生活様式が違っていた。例えば、石狩上流では急流のため、舟が他の地域よりも重く頑丈な作りだった。

縄文時代の遺跡は、低位段丘面のものはシカなどの猟場だった。つまり古い時代には、サケ漁が主な産業ではなかった。縄文遺跡は、台地の縁に出来る小扇状地の上にあった。湿地ではなく尚且つ飲み水が豊富だったからである。

縄文：狩猟採集民（森）の資源多様性→10世紀：漁民交易民（川）一様性